

相 善 体 育

発行所 柏崎体育団

編纂者 近藤 康信

柏崎のニュースポーツ時代を築く

今、社会は強く人々の生活にスポーツを要求し、人々もまた、身体活動を必要としている。にもかかわらず、必ずしも人々は積極的にスポーツを日常生活に結びつけて考えたり、実行しようとしない。元来、スポーツは人間の生活意識から生まれ、そこに生きる住民の手で育まれ、大衆化してきた。住民による、住民のためのスポーツが、スポーツ本来の姿である。が、永い間、学校体育中心の対抗競技的スポーツに馴らされ、限られた狭い世界で成長してきた日本のスポーツ界だけにスポーツの大衆化、即ち、絶べての人々が自分に適した身体活動を実施できる生活の中のスポーツ活動、地域に根ざしたスポーツの振興が難しい現状にある。では、**柏崎は？**
さすがに体育・スポーツに長い伝統を誇る柏崎だけに、近年、地域住民が主役となるスポーツ活動が、住民の手により積極的に展開されている。

ことに、ジュニア、婦人、中高年を対象とする幅広い住民スポーツの振興、強化は、住民の自主事業として確実な成果をあげている。ここに平成四年度を振り返り、五団体の活動状況を紹介し、今後の市民スポーツの振興に供したい。

ソフトバレー・ボールと柏崎市は、縁浅からぬものがある。日本バレー・ボール協会がソフトバレー・ボールを創設した年が一九八八年、その二年後、第一次全国ソフトバレー・ファミリーフェスティバルが、柏崎で開催された。日本協会の松平会長が新潟県の一地方都市にソフトバレー・ボールの運命を賭ける意気込みは大変なものだつた。当市は、その期待に応え大会は大成功だつた。生涯スポーツとして、国民的スポーツとして社会的に認知される結果となつた。

その成績の原因は、市制五十周年記念事業として市民挙げての取り組み、コミセンを競技会場にセッティングしたことなど、柏崎の地域性を生かし、地域活性化を目指した「柏崎方式」の採用と考えられる。柏崎ソフトバレー・ボール連盟の誕生も、このような柏崎の地の利、人の利に恵まれていたためである。一九九一年に県連盟が誕生、その翌年の結成とあって、県内各地への影響は大きく、普及、発展の先達となりうるだろう。

さて、連盟設立に当たつては、目的と加盟登録が重点的検討事項でした。目的については、会員相互の心身の健康と親睦融和を図りながら地域の生涯スポーツとしての振興に寄与することとした。ソフトバレー・ボールのもつ特性を媒体として普及、発展させることによつて目的の実現を期すものである

第二の加盟登録については、広く地域振興を考慮し、地区体協の団体加盟（代表者と複数会員の登録）による連盟構成員の確保に努めることとした。この会員が地域活動の中心になつて地域での振興を図ることを願つてゐる。このように地区体協が実質母体なる試みは他地域ではなく、私どもは「柏崎方式」と呼んでいる。現在、十九地区八十余名の会員を有する。各地区体協の理解、協力に感謝し、近藤康信会長の支援に敬意を表したい。

最後に今後の課題を述べたい。

ソフトバレーボールが手軽で、どこでも、誰でもできるスポーツであるため、住民スポーツとして定着するよう努力したい。素人集団の知恵と情熱から生まれた連盟だけに、会員一人一人が宝物のように大事に育てる様子が伺え嬉しく思う。連盟結成一ヶ月後の県大会では皆んなの積極的協力で幸先よいスタートがきれった。

次に小学校体育の新教材として採用です。連盟所属の保護者の皆さんのが躍の機会が多くなることだろう。

また、平成六年度には、第五回全国ソフトファミリーフェスティバル大会の当市での開催が決定してるので、その成功を期さなければならない。

とにかく市民に愛されるソフトバレーボールになるよう会員の英知を結集し頑張っていきたい。早速に新年一七日には研修・交流会を計画、指導技術

明治社会成り立つ後の諺謎題
柏崎ソフトバレー・ボール連盟会長 関矢

大

卷

や審判の仕方などを勉強し新年度の活動に備えることを計画しました。ヨチヨチ歩きの連盟ながら、先輩諸連盟始め関係各位のご指導ご支援を得ながら自立を図りました。よろしくお願ひします。



スポレクしまね、九一に参加して
かわじデイース監督 金子錦弥

金子參加
錦弥

長かつた昭和の御代が平成に変わった元年四月、当時体育指導委員協議会でとりあげていた男女混合ソフトボールの中から女子選手をリストアップし、チームらしきものが産声をあげる。折柄、生涯スポーツの祭典とし

人二人と県外高校での経験者や社会人チーム出身選手が集まつて、チーム力も向上してきた。

そして第四回県大会の柏崎開催が決ると、三回大会三位の自信もあって冬期トレに熱が入り「全国」を目指す意気込みがひしひし

ろ楯もないチームがここまでこられたのは、全員のチームワークと主人を中心とする家族の協力あってのことだと思います。また、快くグラントを貸してくれた比角、半田、剣野、鏡が沖の各学校、半

ろ楯もないチームがここまでこられたのは、全員のチームワークと主人を中心とする家族の協力あってのことだと思います。また、快くグラウンドを貸してくれた比角、半田、剣野、鏡が沖の各学校、半田コムセン等、多くの地域の皆さんの理解と応援のお陰で、心から謝意を表するものです。

あわせて、我々のスポーツが、スポーツを志される皆さんのために少しでも指針になれれば幸いと思っています。

ニコトちゃん



進める。指導方法もわからず、只基本のキャッチボールとトスバッテングだけを重点的に日曜日に二時間位の練習だけだつた。県大会は一回戦で水原レモンズに敗れはしたものの全国大会へのキッカケを少しでも掴んだような気がしました。

チーム編成以来四年目、いよいよ八月一、二日の県大会を迎える。総合体育館での総合開会式の緊張もさめ止まぬ間に、荒浜球場一回戦、豊栄戦をむかえる。例によつて立ち上がりは悪かつたものの十三対三で快勝する。続く折尾戦は意外に苦戦、三対〇で辛勝。この間、月橋団長の一生懸命の応援があり、選手一同感激、大きな励みになりました。

二日目の準決勝は、燕秋桜と対戦。一回の表に一点先取、五対一で勝つ。全国をかけての決勝戦は新潟が相手、先取点を許したものすぐ追いつくシーソーゲームだつたが、必死の攻防と必勝のチームワークで遂に念願の初優勝、全国の出場権を獲得できた。

小学生女子
バレーボールクラブ
アを創設して
田尻地区子ども会議成会
バレーボール部長

つまり、子どもは育成会という名の通り学校を離れて地域の中で自主的に参加して、体育はもとより、知らず知らずの内に、知育、德育といった面の育成まで受けている。大人は大人で、週二回の練習日を今や、もしかすると子ども以上に楽しみしているのかも知れない。なぜならば、いろんな職業の人達が、この日だけは万難を排して集まつてくるから。。。そこで、持論だが、大人にも「体育の時間」は絶対に必要なのであると主張して止まない。これは、行政などがいくら口を酸っぱくして喝えたってダメなのである。要するに「人のために参加する」という態度では長続きしない。社会体育は、いつも「人集め」「継続」に四苦八苦してきたといふ

史がある。

我がクラブの指導者の皆さんは子どもの育成という大義名分のもとに、実は、自分の健康のため、体力作り(維持)のために集まつてくるのである。そういう場があるといふことは誠に幸せなことである。これぞ「共生」という他の何ものでもないだろう。

それにしても、子どもは素晴らしい。何故なら、怒られても怒鳴られても一向に意に介さず無頓着で、また次の練習日には集まつくるから・・・。

わがクラブの誕生については、もとはと言えば、市制五十周年を記念して本市でソフトバレーボールの第一回全国大会が開かれた際に成されて大人と子どもの寄り集まりのチームがそのまま解散するのが惜しくて発展してきた組織である。バレーボールの大きな特徴でお母さん達に経験者がいて熱心に参加してくれるのが、実はクラブ存続の一番の要因である。我々が胸を張つて言えることは選手を選びすぐつて強いチームを作ろうとするのではなく、集まつてきた子ども達で最強のチームをつくり上げて行くことである。

したがつて、市外、特に下越地区のように素質の備わった子が英才教育的指導を受けたようなチームと渡り合うのは、最初から辛いものがある。県大会に参加して一番身にしみて感することは、当地方のレベル

の低”。何か低いかつて言えば

組織的なもの、もつと分かり易く言えば関係者の情熱だろう。こと

わっておくが、我々の育成会はチヤンピオン志向ではないからして、これはあくまでも県大会に参加して、よそを見ての感想である。日々の練習の指導に当たつて、指導陣が肝に命じていることは、技術的なことでも子どもに根気負けしないということだ。なにしろ「声をだせ!」と言つてもすぐに忘れてしまうのだから・・・。

本市の高校野球なんかでも、招待試合を見るに、一流校との差は一般的な言い方では「パワーが違う」であるが、もつと分析して言えば、あれは選手をして反応の鈍さ、日頃の自覚のない練習の積み重ねの「成果」と言うことになるのである。こんなことは先刻分かりきっているのだが、それなのに何故毎年同じ轍を踏むのか、答えは簡単だ・・・。指導陣が根気負けしているからだ。

算数で九九が分からなくて応用問題が解けるわけがない。いかに基本が大切かということを言いたいのだが、それは必ず何処の指導者もしつこく言つている苦だが、選手諸君が一向に分かろうしてくれれないのか・・・? 打開策は? やはり選手と指導者の根気比べ、指導者の一貫した指導理念による継続、持久指導、根気負けしない強い意志力しかないだろう。

日々の積み上げが何時か結果す

るのだが、わがチー

は、次の練習日になれば前日にや

ったことは大概忘れている。試合の緊張場面ともなれば、その選手の一番悪いところだけが物の見事に波瀾されてしまう。勿論、こうした現象はスポーツ、とりわけ、子どものスポーツ活動では当たり

前のこと。それでも、我慢して、毎日、毎日、一から教えることがスポーツ指導者の鉄則なんだろ。幸い、我がクラブの指導陣は一生懸命に子どもと共生しながら共通の目標をもつて邁進していくのである。何より子ども達には素晴らしい将来があるので、これからもあせらずに、楽しく充実したクラブになるよう努めていきたい。

子ども達

「やつよつと一歩口」 野田地区子ども会 田村 誓



当地区の子ども会の歩みは、金子錦弥氏の熱意と努力により、野球チームを作り昭和五十年八月の第二回全市小学生野球大会に参加したのがきっかけでした。五十年には地区体協が結成され、バレーボールや卓球、野球などの各種大会が行われ、多くの地区民が参加、プレーした。ゲームで流す汗、スポーツに対する熱い想いは、地域の絆を強め明日への大きなエネルギー源となつたことは確かでした。

子ども会もその影響を受け、野球に統いて卓球、バドミントンのクラブを結成することになつた。発足時は、卓球台はおろか球もネットもままならず、バドミントンは木造運動場のため天井が低く、シャトルがしょっちゅう梁にあたつたり、梁の間に雲がくれする等、大変なスタートでした。しかし、指導者の献身的努力と地域の温かい援助に支えられ、五年後、大変なスタートでした。

五十三年五月、柏崎市子ども会連合会の結成により「市子連」に入加入。そのことが他地区との交流

の機会を増し、先進地区に多くを
学ぶことができ、追いつき、追い
越せと、指導者、育成会の組織づ
くりや指導方法の充実、技術の向
上に努め、粘り強い練習に練習を
重ね、今日に至る。

二つには、各種大会等を目標に各地区の指導者のもとで練習に取り組み、技術を競い合うことを Benjamin にしながらも、全体レベルの向上を目指し、指導者講習会、ジュニア選手の合同練習会、日本のトップレベルの選手による技術・理論講習会などを再検討し、充実の方針で具体化していただけたらなあ」と思う。

三つ目は、中央には施設設備の整った立派な総合体育館があるので、その有効利用である。学校五日制とも関わって、異なる地区的、目的を同じくするジュニアアーチャーのスポーツの仲間が、組織的に有効活用することにより、相互の交流を深めながら、選手の技術、競技力の向上は勿論、指導者の指導技術を高め合うことが日常的にできるようになればなあーと思う。また、指導にたずさわる者とし

サッカー協会主催
小学生サッカーリーグ
力一教室

力一協会主催
生「サツ」
主任コーチ 植木正文

心身ともに健全な子どもの育成を願つてがんばらねば——と自分に言い聞かせながら、新しい年の初練習に向けて思いをめぐらせているところである。

て、特に気をつけていることは、ともすると技術偏重の指導になりがちなので、遊び的な要素も取り入れ、発達段階に応じた基礎体力の養成にも配慮をするなど、伸び伸びとおおらかに育てていくこと、スポーツマンらしくマナーなど

もかかわらず他地区に比べ、量、質ともに後進地区と言わざるを得ない実態にある。小学校はゼロ、中学校も一校というクラブ設置状況はさびしい。サッカーの特性から水泳などと同じく、より低年令に始めることが要求される。

こどもはサッカーが大好きだ。思い切り走り回って、ボールを蹴つ飛ばす、本能をくすぐるものに子どもは夢中になる。体育的にも成長発達期の子どもに最も適して

「 」 每年、五月の連休明けから十日まで毎日曜日、午前九時から二時
いる遊びでもある。低学年児童で
も結構楽しめる。

・サッカーの好きな子どもの育成
・ゲームを楽しめる技術の習得、
・クラブや少年団への発展、育成。
昭和六十年、協会設立十周年を機に、我が協会は柏崎のサッカーの普及、強化、発展を期し、幾つかの振興事業を計画、将来的展望にたって確実な活動を展開することとした。事業の重点施策の一つがジュニアの育成だった。小学生大会の企画に統いて、六十一年に「小学生サッカースクール」を開設、以来七年間、サッカーレッスンをして子どもたちに親しまれ、それなりの成果を収めている。

戦後 県内高校のトップをきつて設立されたのが柏高蹴球部、柏崎の一カ歴は古く、長い。に

質ともに後進地区と言わざるを得ない実態にある。小学校はゼロ、中学校も一校というクラブ設置状況はさびしい。サッカーの特性から水泳などと同じく、より低年令に始めることが要求される。

こうした現状に対する対応策として「教室」の実施となつた。

こどもはサッカーが大好きだ。思い切り走り回つて、ボールを蹴飛ばす、本能をくすぐるものに子どもは夢中になる。体育的にも成長発達期の子どもに最も適している遊びでもある。低学年児童でも結構楽しめる。

毎年、五月の連休明けから十日まで毎日曜日、午前九時から二時間、佐藤ガ池サッカー場が教室百名近いチビッ子サッカーマン(女の子も)が、どろんこになつてボールを追つ掛け、疲れを知らず生き生きとサッカー遊びに興じてゐる。一人のコーチ陣も指導者と、いうよりガキ大将、一緒にはしゃぎながら懸命にサッカーの面白さを味わわせようと必死だ。

「お願いします」「有り難うございました」挨拶は子どもの内面的表現だ。他校の子どもも同志の名り合い集団だけに、友達、仲間つくりも大事な勉強の一つ。こんなことがでけるようになった頃、子どものボールを蹴る技術もうまくなる。

親子ゲームでゴールに蹴りこんで子ども以上にはしゃぐ母親、妻

空での豚汁給食、ユースでの合宿生活・・教室は家族ぐるみのスポーツ、集団生活の学習体験、そして、サッカー好きな少年を育んでいる。

いいことばっかではない。雨の日の練習会場の確保は大変。仕方なく多少の雨もがまんし外で練習を強いられる。雨後の佐藤が池は泥田同様、可愛そうだが子どもは文句も言わない！でも――。

教室のメンバーも五年生になるためつきり少なくなる。嫌いになつたのではなく、地区での他のスポーツ活動のためといふ。柏崎の子どもはサッカーができるのは四年生まで、可愛そうだが現状は何ともしようがない！でも――。

幸いコ一チ陣の努力で柏崎ジュニアサッカーラブが誕生、県スポーツ少年団大会に参加している（柏崎はサッカーのみ）。が、市内に対戦相手もない。こんな地区も珍しい。今やサッカーは国民的スポーツとなりつつある。新潟県も世界大会の誘致に乗り出したことも承知の通り。柏崎も市内各地域に少年チームをつくり、市民に親しめるサッカーの振興を图らねばならない。協会課題だ。協会員の意欲、そして、体育団はじめ市民の応援により実現を早めたい。号の話題をお寄せ下さい。（近藤